

遠藤周作の『留学』論

一 留学の意味を中心に 一

陸根和*

目次

1. はじめに
 2. 遠藤周作の留学体験と作品『留学』とのかかわり
 3. 各章の主題についての考察
 - 3-1. 第一章 「ルーアンの夏」
 - 3-2. 第二章 「留学生」
 - 3-3. 第三章 「爾も、また」
 4. おわりに
-

1. はじめに

現代日本の文学者の中で、カトリックと日本土着宗教との葛藤と対立と融合の関係をもっと深く探ることを試みたのは遠藤周作であると言える。彼の問題意識は一貫して、'日本人にとっての神の存在'と'日本におけるキリスト教'との関連におかれている。

遠藤がカトリック作家としての文学に対する認識と一生のテーマを持つきっかけとなったのは、彼のフランスへの留学である。彼が最初の留学を終えてから13年目に世に出した作品『留学』は、彼の文学世界の源になった留学の総決算ともいえるという点で、見逃すことのできない作品であると思われる。

作品『留学』は、特異な構成と成立過程を持つ作品である。1)『留学』は、それぞれ内容の独立した三つの作品一<第一章「ルーアンの夏」、第二章「留学生」、第三章「爾も、また」>一で構成される長編小説である。刊行当時、一章と二章のつながりにあたる中間二枚と末尾の十五枚分が削除されたことで、全体が三章に改編された。

* 大田大学校 日語日文学科 助教授 日本近現代文学

1)『留学』のテキストとしては、遠藤周作文学全集第二巻 長編小説『留学』新潮社1999.6刊使用。

各作品の発表は、この順序どおりではなく第三章の「爾も、また」が先立って1964年2月から1965年2月まで「文学界」に連載され、第一章の「ルーアンの夏」と第二章の「留学生」は、1965年3月に表題「留学」として雑誌「群像」に発表され、三章の合巻としての『留学』は、1965年6月に文芸春秋新社より刊行された。²⁾

このように『留学』という一つの題名の中に納められている三つの作品は、'留学'を素材にしているという共通点はあるものの、それぞれ主人公も時代も、また表面的な内容も別の作品のように見える。³⁾内容の分量からいっても不均衡をなしており、第一章が全体の12%、第二章が6%、第三章が82%をしめている。

本稿では、内容や形式の面においても異なるかのように見える三つの作品の綿密な分析を通して、一つの作品としての主題を把握し、作者遠藤が示そうとした真の留学の意味を探ってみたいと思う。

2. 遠藤周作の留學體驗と作品『留學』とのかかわり

遠藤は、二度にわたってフランス留学を体験している。一度目は、フランス現代カトリック文学を勉強するために、戦後日本初のカトリック教会の留学生として、1950年6月から1953年2月まで約2年8ヶ月間(滞仏期間は2年半)、主にリヨンを中心に留学生活を送っている。

到着直後、ルーアンの建築家ロビンの家庭に寄居し、10月のはじめ、リヨン大学に入学する。1952年4月末頃から結核の徴候が表れ、6月から9月まで国際学生療養所で入院生活を送る。その後パリに移り、ジュルダン病院に入院、病気のため翌年の2月に帰国をよぎなくされている。

二度目の留学は旅行といってもいい短期間のものであったが、サド研究補充のため妻を伴って、1959年10月渡仏し、サド研究者たちに会う。その後、イギリス、スペイン、イタリア、ギリシア、エルサレムを経て1960年1月帰国するが、帰国後、結核が再発して東京大学病院に入院、年末には慶応病院に移り、三回の肺手術を受けている。

本章では、遠藤にカトリック作家としての方向づけを与えてくれた留学体験を調べ、その経験が作品

2) 小久保 実 『遠藤周作の世界―「留学」』 明新社 1983.4 p.90

3) 西尾宣明 『作品論 遠藤周作―「留学」論』 双文社 2000.1 p.118

作品の構成について竹田友寿は、'東西文化のパターンに由来する相互理解とか、文化交流についての遠藤の深い疑惑'といった点をあげ三部作を一つの統一された作品としてとらえている。これに対し、玉置邦雄は、フランス留学の点においては共通するものの、筋や登場人物は無関連であるし、それ以上に主題設定において異質だからである。三部作として連作した、遠藤の内面的創作モチーフにおいて共通性が認められるが、それは決して統一的作品として『留学』を成立させる本質的な要素ではないといえる¹⁾、上笠英郎も『留学』は三章から成り立っている。それぞれ三人の留学生が描き分けられているが三人にはなんのつながりもない。ここで三度こわたって、時をかえ、人をかえ、作者は渡欧体験の意味を問おうとしているのである²⁾と竹田友寿の考えとは反対側に立っている。

『留學』にどのように影響し、その関連性はいかなるものであったかを考察してみることにする。

第一章 「ルーアの夏」の主人公工藤は、第二次世界大戦後、西洋に派遣された最初の日本人留学生の一人で、キリスト教文学が留学のテーマになっている。ローマのカトリック東洋布教会では東洋の学生たちをヨーロッパの各国に留学させる計画をたて、工藤は、フランス留学生として選抜されたのである。彼はルーアの熱心なキリスト教の信者のペロオ家に寄居し、ルーアの人々から彼の勉強が日本での布教に役に立つだろうと期待され、しだいに疲れて気持ちが沈んでいく。

主人公工藤はまぎれもなく遠藤の自身の表出といえる。勿論、作家と作品との関わりは、作品を理解するうえで、あまり大事ではないかも知れない。しかし、カトリック作家遠藤にとっては、彼自身の信仰を含め、私生活の中での経験すべてが、作品の精神世界にそのまま溶け込み、'教会のイエス'か'私のイエス'かという根源的な問いかけまで出てくるような結び付きであるから、作家遠藤への研究は、彼の作品研究において欠かすことのできないことである。

「ルーアの夏」の工藤の行跡を辿ってみると、リオンで泊まった家庭がロビンさんからペロオさんに変わったぐらいで、終戦後という時代的背景から、遠藤が留學生活を送った都市、大学の名、遠藤の洗礼名のパールなどまでも同じである。

君と同じ年に生まれた息子さんでね。日本に布教に行きたがっていた。ペロオ夫人 が君あずがってくれたのも、その息子が持っていた夢をこういう形で実現しようと思 われたんだろう。(p.12)

ポール。ポール。工藤はこの家では夫妻や、アンヌさんからこんな名前と呼ばれて いる。それは彼がむかし、洗礼を受けた時もらった霊 名だが、ペロオさんの死んだ息子 も偶然同じ 名だった。(p.13)

君たちの留学がやがて日本の布教に貢献することをだ。そのために仏蘭 西の信者た ちは 金を出してくれたんだし、ペロオさんも悦んで君を引きとるわけだからな。(p.12)

とりあえずこれだけ渡しておかかね。いいか。その一枚、一枚の紙幣に仏蘭 西信者 の期待がこめられていることを忘れんようにしなさいよ。(p.13)

カトリック作家遠藤に大きな影響を与えてくれた宗教的な体験といえば、母によって受けさせられた幼児洗礼をあげることができる。

遠藤が10才の時、両親が離婚して彼は母と一緒に日本に帰り、神戸で幼年時代を送ることになる。神戸には、熱心なカトリック教徒の伯母がいて、彼女の影響で母もカトリックに入信、心血を注いだ信仰生活を送る。遠藤もかかる母の切ない願いに背くことができず、昭和10年12才の時、ポールという名前前で洗礼を受ける。4)第一章は、他の章よりも、遠藤の実際の留學生活に一番近く詳細に描き表わした作品

4) 遠藤周作 『石の声』 冬樹社 1965.12. p.181 p.190

遠藤は「私の文学」と「合わない洋服」の中で、汎神論世界の日本人の感覚からくる西洋のキリスト教に対する矛盾と葛藤について書いている。

である。

第二章「留学生」の主人公荒木トマスは、17世紀にローマで司祭になった日本史上初の留学生といえる人である。当時の日本は、キリスト教への厳しい迫害が行われていて、ヨーロッパのキリスト教会では荒木に多大な期待を寄せる。しかし、迫害の日本に潜伏した荒木は、捕らえられ拷問をうけ棄教することになる。

現代ではなく17世紀の人物荒木トマスを主人公にした第二章「留学生」が『留学』という一冊の作品の中に挿入されたことに、いろいろな面において考えさせられる。

なによりも、17世紀の人物と遠藤自身はいかなる客観性によって、その関わりを形成したのか。

まず、二人の人物の生きた時代は異なるが、その背景を比較してみると二つの共通点が上げられる。荒木トマスが日本歴史上初めての留学生であって、彼に迫害下の日本への布教を期待しているという点であり、遠藤も第二次世界大戦後、最初のヨーロッパ留学生であって、カトリック教の勢力がまだ微々な日本への布教を彼に期待しているという点である。

人々はこの極東の島国の青年が自分たちと同じ宗教を学んでいることに感激した。聖ザビエルにならって日本に布教しようという情熱にかられた若い宣教師たちは、極東の島国の情勢をきくために次々と彼をたずねてくる。信徒たちはこの留学生を自分たちの勝手な夢のなかで挑め、彼をしばしば自宅や晩餐に招いて悦んだ。

知遇をえ、皆から期待されるにつれ、荒木トマスの顔は次第に憂鬱になっていった。 <省略>

ローマで人々から寄せられる愛情や親切は、いつか、辛い重い荷物になりはじめた。みなの前でその期待に相応しいような姿を毎日とり、一日中、微笑を顔にかべねばならぬことに彼は疲れてきた。(p.34)

荒木トマスとポール遠藤は、日本への布教の礎として周りから期待され、その重圧感に疲れはてている人物である。個人の利害打算のためではなく、自分自身が信じている宗教に対する信念と熱情による彼らの善意を拒否することができず、二人の人物は本音の衝動を自ら抑え、内面の葛藤に激しく揺れ動いている。

第2章で、17世紀のヨーロッパ留学生荒木トマスの行跡を辿ることによって時代を越え、遠藤も同じく感じ味わった受身的な立場からその関連性を見い出すことができる。西洋文化への距離感についての関連性は、第3節で主題を考察することにより、一層明確に明かそうと思う。

第三章「爾も、また」の田中は、大学の講師で主にサドを研究している。サド研究者のルビイから“なぜ東洋人のあんたが、サドを勉強するのかわからん”といわれる。この問いは、田中の脳裏から離れず、自分の学問への真の意味を問い続けている。田中は、田中の分身ともいえる向坂がいう、ヨーロッパ

遠藤は、幼児洗礼について「基督教は私にとって成長期と共に母親から着せられた洋服のようなものであった。しかし青年時代から、私はこの洋服が自分の背丈に合わぬことにくるしみだした。私の体にはこの洋服は洋服であり和服ではなかったと述べている。

の文化の大いなる'河'を知り、挫折と嫌悪感を感じながらもやみがたい憧憬を持ち続けている人物である。彼は結局、結核にかかり、帰国しなければならない状況に陥ってしまう。

遠藤のエッセイ『出世作のころ』と『遠藤周作による遠藤周作』では、次のように自分の留学生生活を回想している。

孤独で辛く、金もなく、最後には咯血するという留学生活だったが勉強だけはかなりやったと思う。5)

このヨーロッパは日本人の感覚ではついていけぬ何かがある。善の深さも悪の深さも、その高貴な精神もその美しい芸術も。私はわずかな年月ではあったが巨大なその壁にぶつかり、自分とこの国々との距離感だけを強く意識するようになった。そしてその揚句「病気になった」。6)

遠藤が健康を害し、留学を途中でやむをえず放棄しなければならなかった状況や、彼が留学中の重要なテーマの'人間内部の原初的なものに到達すること' '罪の根元に遡ること'こそが、やっとみつけた自分の文学方法であると『作家の日記』で明らかにしたことが7)、本章では、サドについての研究として現われている。この内容は、エッセイや小説の領域を越え、サドへの研究論文と評されるほど、深みのある学術的な内容を持っている。

かかる遠藤の好奇心は、留学前に発表したエッセイ『カトリック作家の問題』で言及した'人間存在の最も内部的なものを凝視し' '一人の人間が他の存在におきかえられぬ独自の魂に光をあてるために作中人物の魂の秘密、その罪、その悪さえ直視せねばなりません'とも深い関聯性を持っているという点で第三章もカトリック作家遠藤の思想を覗くことのできる作品であるといえる。8)

このような面から遠藤のフランス留学は、汎心論世界のカトリック信者とカトリック作家としての生き方に見逃すことのできない関わりを持つ原体験といえる。

3. 各章の主題についての考察

5) 遠藤周作 『石の声―「出世作のころ」』 冬樹社 1970.12 pp.202~ 203

初出 「読売新聞」 昭和43年2月5~13日

'フランスといえば現代的な国だと錯覚していた私にとっては始めて生じたこのフランスの街が長い因習と伝統をかたくなに守りつづけていることに驚いた。私の接する学生も家庭もことごとくブルジョワのおいをもっていた。彼らが習慣的に信じているキリスト教はすでにあたらしい時代のいぶきをささえかねていたとも語っている。

6) 遠藤周作 『遠藤周作による遠藤周作』 青銅社 1980.10 p.85

7) 遠藤周作 『作家の日記』 作品社 1980.9 1950年6月から1952年8月まで参照要望。

8) 遠藤周作 『石の声―「カトリック作家の問題」』 冬樹社 昭和45. 12 p.108

上同 「私の文学」 p.187 の中でも同じ意味の言葉を述べている。

'小説家の義務はあくまで人間凝視であり、その義務をまもるために作家は人間のなかの美しい部分とともに、その最もよこれた内側にも眼をひらき手をいれねばならぬと書いている。

本章では、各章を分析し、その主題を把握してみることで、三つの作品の中に流れている真の留学の意味を探ってみることにする。

3-1. 第一章 「ルーアンの夏」

この作品の主人公工藤はフランス人カトリック信者たちに囲まれ、その独善的な善意にさらされている留学生である。遠藤が、工藤を通して描き出した留学体験の象徴的なイメージを表わそうとすれば、この章の冒頭に書かれている「鏡」ということになる。

こんな鏡を工藤は日本で一度も見たことはない。楕円形の形はいいとしても唐草模様の縁をけばけばしい金色で塗りたくっている。バロック風の装飾を真似たのだろうが、どうみても品のいい品物ではない。おまけに「これによりて汝の真の姿を正せ」と言う言葉かいた銅板をはめてある。(p.9)

遠藤の分身の日本人留学生工藤の場合、「西洋という鏡を通して写し出された」東洋人としての自分の映像とは、掛け離れることのできない必然的な関係を持っている。なぜなら彼にとってキリスト教は、幼い時から西洋のキリスト教そのものとして疑懼の念をいだくこともなく、絶対的な価値を持って認識されてきたからである。

しかし、フランスに到着早々、今まで憧憬を持ってきたその世界には深い嫌悪の情かられてしまい、しだいに疲れ、気持ちが重く沈んでいくのである。

鏡の中にうつった自分はどう見てもきたない。それは彼の容貌が悪いためだけではなく「汝の真の姿」がどこにもないからだ。今、しおらしい顔をして手を前に組みあわせている自分は本当の自分なのだろうか。(p.19)

工藤は心も体も疲れ果てたような気がして部屋の真中にぼんやり立っていた。〈省略〉(自分は今後、留学中、ずっとこんな気持ちを持つのか)(p.29)

第一章には、無力感に陥り、先の見えない暗澹たる気持ちが全体的に貫いている。日本ではみたこともない下品な鏡に「昼寝を済ませたばかりの、汗の滲んだ顔がうつって」いて、常の己れの姿とはあまりにも隔たりのある馴染めないものとして映し出されているのである。それが意味するのは、白い世界への距離感であり、そのなかの自己の疲れや葛藤の表出であるといえる。

しかし、彼は、期待を押し付けられた者として表面的には消極的な態度をとっているものの、心のなかでは激しい葛藤に揺れ動いているのがわかる。

このセーヌ河のずっと上流には巴里がある筈だ。ルーアンとちがって、おそらく彼に息をつかせてくれる都市がある筈だ。(p.10)

選ぶな一つの立場を選ぶな。一つの思想を選ぶな。選べばお前はその角度でしか人生を眺められなくなる。(司祭がまさにそうだな。ペロオ家の連中がそうだな。与えられた教理で固まった眼で万事を割り切っているんだ)(p.21)

形式的に固まった保守的なルーアンを離れば、もっと国際化された都市があるだろうと考えている工藤の願望は、ほかならぬ未だつかめられない普遍的な真理としてのカトリック教への切実な叫びであるといえる。それは、黄色い人として今まで慣れてきた、白い世界への嫌悪感の表われであり、白い人を基準にしたカトリック教への問いかけである。「ルーアンの夏」に描れている皮膚色についての認識も、単なる人種問題を越えた、'白い世界'をなしているカトリックという宗教への疑問、葛藤であるといえる。留学中、町の人々にはだれも、工藤を黄色人種として差別してはいない。しかし、集まりでの工藤への質問――日本の大学の数とか家の構造について――のなかには、やはり無意識のうちに世界の文化の基準は、紛れもなくフランスであるという白人としての優越感が根強く内在している。工藤はそれに強い反発を感じるようになるのである。

このような工藤の心象変化の過程を経て、黄色い人としての劣等感が次のような強靱な信念に変わっていく。

私の国には基督教が結局はその根を腐らしてしまう風土があるのだ。あんたたちが考えているような生やさしい国ではないのだ。(p.28)

西洋に慣れる一方だった主人公は、とうとう日本という東洋の自分の国における宗教的な土壌について深く考えるようになり、ここで遠藤の〈日本人にとってのキリスト教〉という宗教的な問いかけが現われてくる。

「ルーアンの夏」は、今まで西洋という'鏡'を通して自分を映してきた主人公が、始めて持つようになった東洋という'鏡'を通して西洋の白い世界を映しだしてみようという新しい認識への変化を描き出した作品として、カトリック作家遠藤にとって留学体験の大事な意味があるといえよう。

3-2. 第二章 「留學生」

第一章の「ルーアンの夏」と第三章の「爾も、また」の現代日本の留学生二人にはさまれて、第二章の主人公荒木トマスは、日本初の欧州留学生で17世紀初期の人物である。⁹⁾第一章が作家遠

9) 前掲書 「留學生」 p.32

藤自身の第一回目の留学の経験を、第三章が第二回目の留学をモデルにしているので、荒木トマスという歴史的な存在の意味がより際立つように思われる。

それでは、遠藤は、本人のモデルでもない荒木トマスという歴史的な人物を通して、何を語りたかったのであろうか。本章では、その真意を探ってみることによって、主題に接近して行くことにする。

まず、荒木トマスはどんな人物かを知るために、彼の重要な行跡を辿ってみよう。

彼はいつ、どこで生まれたかははっきりしていない。トマスという洗礼名はわかっても、本当の日本名も不明である。彼に関する資料はほとんど残っていない。なぜなら、彼が様々な苦悩を乗り越え神父になったものの、最終的には、背教し、転びバテレンになったからである。

確なことは、彼は九州で育ち、少年の頃には既に洗礼を受け、カトリック的な教育を西洋司祭の手によって受けたことである。1587年7月、秀吉は、切支丹禁制の布告を出し、荒木はマカオに逃れ、印度のゴアを経て、大体1600年から1601年頃ローマに辿り着く。いつ司祭になったかも不明にされているが、司祭に任ぜられたことは確である。

1615年マカオに姿を現わし、1617年の冬ポルトガル船で日本の長崎に着く(推定45才過ぎ)。1619年8月10日に逮捕され、棄教を命じられると一度は首を横に振ったが、拷問にかかるとすぐ転んだ。棄教した彼の役目は、信徒たちの取り調べの都度、証人として登場することであった。彼がいつまで生きていたのかわからないが、記録に残っているのは、1637年長崎奉行所で聖ドミニコ会のミカエル・オザラザ神父と取り交わした会話だけである(推定65才過ぎ)。それは「汝のラテン語は善し、されど汝の信仰は悪し。汝の留学は無駄であった」である。

遠藤は、なぜ転びもの、棄教者、背教者といわれる人物を主人公として描き出したのか。この疑問に関連のある文章が、「留学性」の初頭のところに書いてある。

だいたい切支丹史の中では迫害中に殉教した司祭や神学生については比較的研究されているが、転んだもの、教えを棄てた者となると曖昧なまま放り棄てられているのは、当時の宣教師やローマ当局がこれら教会の汚点となった人間たちをできるだけ黙殺し、隠しておこうとしたためであろう。(p.30)

日本の封建時代におけるキリスト教弾圧は、過酷をきわめ、多くの宣教師や信徒たちは拷問を受け処刑されたり、あるいは外国に追放されたりした。教会の歴史は栄光の歴史だけをつたえているわけであ

荒木がヨーロッパへの初めての留学生かどうかについては色々な説があるが、遠藤は作品の中で次のように述べている。

「荒木は日本で始めてヨーロッパに行く留学生となった。勿論、彼より前に欧州に渡った日本人が五人いる。最初の一人は鹿児島島のベルナルド某という人でこれは聖ザビエルに伴われてゴアに行きそれからリスボンに行った。あとの四人はローマに切支丹大名の信書を運んだ天正使節の少年たちである。しかしベルナルド某はポルトガルで病死し、天正使節の少年たちはあくまで使節であって、勉学のために渡欧たものではなかった。荒木トマスこそ本当の意味で日本で最初のヨーロッパ留学生だったのである。」

るから、彼らの中で死を恐れず、信仰を守りぬいた人々は教会の誇りとして記録され、殉教者として讃え高められた。しかしながら、不幸にも棄教しなければならなかった転びキリタンについては教会史は、何も語ってくれないのである。荒木トマスについても日本人背教徒、ヨーロッパに留学し、各地で歓迎され、ために意、傲る'ということだけ記録されている。

遠藤は、このような転びキリタンにはいらなかった棄教者たちを、単に個人的信仰が弱かったのだと簡単に片付けるわけにはいかないと思い、彼らのことについても聞きどどけてやらねばならないという考え方を持っている。10)

転びバテラン荒木トマスという人物は、遠藤の代表的な作品と評される『沈黙』へとつながる人物像で、それは遠藤の<愛の神>として弱い人の同伴者イエスのイメージが始めて輪郭を現した人物ともいえる。遠藤の関心の眼は、強い人よりはむしろ弱い人に、光よりは闇の世界で苦しんでいる人にある。遠藤は荒木トマスの口を借りて次のように反論している。

宣教師たちは信徒たちに殉教の夢を強いている。殉教を期待している。殉教だけが今は神につながる道であり、もし、それを拒むのは、神を裏切ることだと考えている。だが、そんな過酷な道しか信仰にはないのか、これが荒木の理窟だった。〈省略〉

「もう沢山だ。ほっておいてくれ。日本人にあなたたちの考えを押し付けなくていい。それ」(p37)
 どうかローマ教会はもう日本人たちのことは構わないでくれ。この日本人たちにあなたちの理想と夢をこれ以上、押し付けなくてくれ。(p.38)

ここで訴えているのは、西洋の秩序をなしているものの本質への問いかけで、言い替えば、殉教を押し付け、棄教者を断罪する、厳しい裁きのイメージをもっている西洋の神の存在への疑問ともいえる。11)

こう追求してみると第二章も、第一章とほぼ脈絡をともにしているのがわかってくる。それは結局、<日本人にとってのキリスト教>への距離感であって、遠藤の言葉を借りていえば、他人から着せられたダブダブの洋服(キリスト教)を自分の体に合う和服にするための留学経験であったといえよう。12)

3-3. 第三章 「爾も、また」

第三章の主人公田中は、大学のフランス文学科の専任講師で、サドを'研究するためパリにやってきた人である。田中の分身ともいえる向坂は、もう二年半もパリで建築学を勉強している人で、田中を鏡のように映し出している人物である。彼の分類した日本人留学生のタイプは、真の留学の意味をいろいろ

10) 陸根和 「遠藤周作の『沈黙』への一考察」 日本学報 第31輯 1993.11 参照要望

11) 前掲書 「留学生」 p.37

'彼らには日本を基督教国にしようとする烈い夢があり、死をも辞さぬ英雄主義に刈られている。とキリスト教に對する真の意味にも疑惑を持っている。

12) 対談遠藤周作・三好行雄 「文学——弱者の論理」 国文学 昭和48.2 p.11

ろと考えさせる。

その類型は三つに分けられている。タイプⅠは、パリの重みをまったく無視する連中、タイプⅡは、その重みを小器用に猿まねする連中、タイプⅢは、パリの文化の渦の中に呑み込まれて身を滅ぼす連中である。田中は、タイプⅢにあたり、汎神論の世界の彼には、唯一神のカトリック教の本質が理解できないのである。その焦り、もどかしさを抱きながら、田中はサド研究家のジルベール・ルビンを訪問することを始め、ソルボンヌのバディ教授の講義を一度も欠かさずに聞き、リシュリュー街の国立図書館で気を失うほどむきになって資料を調査し、雪の中のサドの遺跡のところでは、結局血を吐き出してしまう。

田中さんも河を無視しないで、毎日この国で生活すると言いたいんでしょう。でもそりゃあ、実に辛い留学生活ですよ。河に入るため、私たち留学生は何かを代償に支払わねばならないんだ。ぼくは自分の肺をそのために支払ってしまったんだ。(p.93)

向坂も体を害したが、田中も結局、結核にかかり、帰国しなければならぬ状況に陥ってしまう。ここで「河」は、ほかならぬ長い歴史を持つ西洋の文化であり、その本質はその文化を形成しているカトリック教である。

「いや、もう来ない。もう沢山だ。田中さん。こんな詰まらん小さな美術館一つに入っても、ぼくら留学生はすぐに長い世紀に渡るヨーロッパの大河の中に立たされてしまうんだ。ぼくは多くの日本人留学生のように、河の一部だけをコソ泥のように盗んでそれを自分の才能で模倣する建築家になりたくなかっただけなんです。河そのものの本質と日本人の自分とを対決させなければ、この国に来た意味がなくなってしまうと思ったんだ。田中さん。あなたはどうします。河を無視して帰国しますか」(p.91)

田中が「河」を無視せず、体を代償にしてつかんだのは何であったのか。それは精神的には、到底埋めることのできない大なる西洋文化への距離感であり、肉体的な感覚としては、サドが歩き、ローズ・ケレルが走っていった石畳の石にたいする「肉欲の疼くような感覚」「目眩に似た感覚」である。¹³⁾

第三章の相当の部分で占めているサドへの研究は、敬虔なカトリック信者である遠藤が、暗黒の肉欲の世界に落ちたサドのような人間を何ゆえに研究対象にしたのか、いろいろと考えさせるところがある。

作品の中では、「私生活でも精神の上でもあまりに隔たった人間だ。だから俺はサドを選び研究する甲斐がある」と明かしている。¹⁴⁾しかし、もっと根元的な理由は、第2節で言及した人間内部の原初的な

13) 前掲書「留学生」p.68

こんな道は日本には決して存在しなかった。その人間の生きている臭いかしみこみ、人間の足の脂臭気かしみこんでいる石の道を見たことがなかった。〈省略〉田中はできれば、ほしくりだして持っかえりたかった。そして恥かしくなければそれを舐めまわしてみたいとさえ思った。肉欲の疼くような感覚を感じながら田中は眼鏡を幾度もずりあげる。〈省略〉今、石畳の道を眼鏡をずりあげて感じているこの目眩に似た感覚は確であり、自分自身のものだと考えた。

のに到達すること'罪の根元に遡ること'であり、それは、'人間存在の最も内部的なものを凝視し、'一人の人間が他の存在におきかえられぬ独自の魂に光をあてるために作中人物の魂の秘密、その罪、その悪さ直視せねばなりません'といった遠藤の思想にあると思う。

つまり、肉欲の探求者といわれるサドへの研究は、厳しいキリスト教秩序の中で、一生をその秩序に反抗しながら生き抜いた人間への研究ということであり、それは人間の罪の根元への探求を意味する。遠藤は、罪を通してカトリック教の救済の道、罪さえも生かし、光の世界に導いてくださる神の存在への問いかけを試みているのである。

いいかえれば、外国文学者として、距離感を持っている作家サドへの研究を通して、ヨーロッパの精神世界を支配する西洋キリスト教の根元への接近であるといえる。

時には私はあの河と日本の河とが本質的に同じものだと考えようしました。なぜなら形だけの相似なら、日本の河をあの河とには幾つもの近似関係が成りたつのです。
 <省略> 外形はほとんど同じでもそれを創りだしたものの血液は、同じ型の血ではなかった。このくるしい事実には私は二年間毎日毎日生活したのです。<省略>我々は別の血液型の人から血はもらえない。(p.174-175)

遠藤は、'河'の本質をつかむため、サドを通して'靈魂と肉体との戦い'を重要な問題として取り上げている。15)キリスト教という普遍的な真理がなぜ我々日本人には合わないのかという疑問から、'日本人にとっても神の存在'と'日本におけるキリスト教'への問いかけが始まっているのである。

第三章「爾も、また」は、健康を害し、帰国を余儀なくされた田中の泊まっていた部屋に、田中の到着当日と同じようにおどおどしながら、留学への期待に満ちた新しい留学生が入ることになる場面で終わっている。

'爾も、また'という最後のセリフは、'俺は捨石だったのか。踏石だったのか……'という反問とあわせ、留学の意味を深く考えさせるのである。

IV. おわりに

14) 前掲書「留学生」 p.133

外国文学者とは、外国文学と者（自分との違和感をたえず意識している人間なのだと思う。自分と全く異質で、自分と全く対立する一人の外国作家を眼の前におき、自分とこの相手とのどうにもならぬ精神的な距離劣者としての自分のみじめさをたっぷり味わい、しかも尚その距離と格闘しつづける者を外国文学者とよぶのだ。サドは俺ではない。俺はサドのように偉大ではない。サドと俺とは私生活でも精神の上でもあまりに隔たった人間だ。だから俺はサドを選び研究する甲斐があるのだろう。

15) サド研究の内容については、次の論文で考察する予定である。

本論文では、「留學」という一つの作品としての共通点に中点おいて論ずる。

作品『留学』は、作家遠藤の留学を基にして書かれた自伝的な小説であるといえる。三つの作品の主人公、工藤、荒木トマス、田中は、三者三様の形をとり、作家の分身として一神論風土の世界の中で初めて、汎神論的カトリック信者としての距離感を切実に感じ、絶え間なく自己存在への問いかけを続けている。彼らが直面するのは、西欧的なキリスト教が作り上げた文化であり、三人ともその文化の根元にあるものにおつかり、挫折し、途方にくれてしまう。

三作品の主人公は、共通して疲れや虚脱感のために消極的な受身の姿勢をとっている。しかし、内面の世界では、'あんたたちが考えているような生やさしい国ではないのだ'この日本人たちにあなたたちの理想と夢をこれ以上、おしつけないでくれ'外形はほとんど同じでもそれを創りだしたものの血液は、同じ型の血ではなかった。我々は別の血液型の人から血はもらえないと叫んでいる。16)

遠藤は、作品の中で留学体験の意味を、単なる'白い人'に対する'黄色い人'の恐れ、もっと直説的にいえば'黄色い人'としての劣等意識から生まれてきたみじめさだけのものとして受け入れるのではない。そのような意識の根底に、'白い人'の'白'が象徴される、ヨーロッパ的なキリスト教と、それが作り出してきた思想と文化そのものに深い疑惑と批判が向けられているということに、もっとも大事な意味があると思う。

つまり、遠藤は留学を通して初めて、<日本におけるキリスト教>と<日本人にとっての神の存在>という問題を提起するようになったのである。留学以後一生を、人種を越え、普遍的な真理としての神の存在と人間救済への問題を探求し続けてきたカトリック作家遠藤を考える時、彼の留学は、'踏石としての原体験'として深い意味があるといえる。

【参考文献】

- ・陸根和(1991) 『遠藤周作におけるイエス像序説』 実践国文学 第四十号
- ・_____(1993) 『遠藤周作の「沈黙」への一考察』 韓国日本学会
- ・_____(1997) 『遠藤周作とキリスト教』 大田大学校 人文科学研究

16) 各々の文章は、「ルーアンの夏」「留学生」「爾も、また」から抜粋したものである。

- ・遠藤周作(1970) 『石の声ー「出世作のころ」』 冬樹社
- ・ _____(1980) 『作家の日記』 作品社
- ・ 広石廉二(1991) 『遠藤周作のすべて』 朝文社
- ・ 川島秀- (1993) 『遠藤周作：愛の同伴者』 和泉書院
- ・ 西尾宣明(2000) 『作品論 遠藤周作ー「留学」論』 双文社



要 旨

作品『留学』は、作家遠藤の留学を基にして書かれた自伝的な小説であるといえる。三つの作品の主人公、工藤、荒木トマス、田中は、三者三様の形をとり、作家の分身として一神論風土の世界の中で初めて、汎神論的カトリック信者としての距離感を切実に感じ、絶え間なく自己存在への問いかけを続けている。彼らが直

面するのは、西欧的なキリスト教が作り上げた文化であり、三人ともその文化の根元にあるものにぶつかり、挫折し、途方にくれてしまう。

遠藤は、作品の中で留学体験の意味を、単なる'白い人'に対する'黄色い人'の懐し、もっと直観的にいえば'黄色い人'としての劣等意識から生まれてきたみじめさだけのものとして受け入れるのではない。そのような意識の根底に、'白い人'の'白'が象徴される、ヨーロッパ的なキリスト教と、それが作り出してきた思想と文化そのものに深い疑惑と批判が向けられているということに、もっとも大事な意味があると思う。

つまり、遠藤は留学を通して始めて、<日本におけるキリスト教>と<日本人にとっての神の存在>という問題を提起するようになったのである。留学以後一生を、人種を越え、普遍的な真理としての神の存在と人間救済への問題を探求し続けてきたカトリック作家遠藤を考えると、彼の留学は、'踏石としての原体験'として深い意味があるといえる。

キーワード：留学、原体験、信仰、棄教、西洋、カトリック作家

투 고 : 2003. 5. 31

2차 심사 : 2003. 6. 11

3차 심사 : 2003. 7. 8

住 所 : 300-716 대전광역시 동구 용운동 96-3 대전대학교 외국어문학부 일어일문학전공

電 話 : 042-280-2257

E-mail : yookgh@dju.ac.kr